

主 文  
原判決を破毀する。  
本件を京都地方裁判所に差戻す。  
理 由

京都地方裁判所検事正中村昇の被告趣意は別紙上告趣意書と題する書画記載の通りである。被告A、Bの辯護人武松久吉、大竹武七郎、被告人Cの辯護人田邊哲の答辯の要旨は右辯護人三名名義の答辯書と題する別紙書面記載の通りである。よつて審案するに昭和二十一年十一月三日以前に國家總動員法第三十一條の二の罪を犯した者は赦免せられるのであるがその罪に該する行為が聯合國占領軍の占領目的に反する行為（昭和二十一年勅令第三百十一號第一條第二號乃至第八號又は第二條第三項に掲げる行為）であるときは赦免せられないことが明白である。記録を調査すると本件公訴事實は所論の通りであつて右は國家總動員法第三十一條の二第八條物資統制令纖維製品消費配給統制規則第九條刑法第五十五條に於けるものであるからその公訴權が右大赦令によつて消滅するか否かは被告人等の行為が占領目的に反するか否かにかあつてゐるわけである。而して右大赦令第一條但書の趣旨は右行為を占領目的違反罪として赦免しないのでないから占領目的に反するかどうかは客觀的に定むべきであつて被告人等において行為が占領目的に反するとを知らなくても苟も行為がこれに反する以上赦免せられないものと解すべきである。ところ〈要旨〉で昭和二十一年勅令第三百十一號第二條第三項にこの勅令において占領目的に有害な行為というのは聯合國の最高司令官の日本帝國政府に對する指令の趣旨に反する行為、その指令を施行する爲に聯合國占領軍の軍、軍團又は師團の各司令官の發する命令の趣旨に反する行為及びその指令を履行する爲めに日本帝國政府の發する法令に違反する行為をいうのであると定められてあるから右大赦令第一條但書にいう占領目的に反する行為には前記指令を履行する爲めにわが政府の發する法令に違反する行為の外聯合國最高司令官の日本帝國政府に對する指令の趣旨に反する行為をも包含すること明白であつて右指令の趣旨に反する行為とは指令が直接わが國民に對し拘束力を有すると否とを問はず苟も行為が客觀的に指令の趣旨に反するときは占領目的に有害な行為という趣旨に解するのがわが政府の發する法令違反の行為の外に指令の趣旨に反する行為を掲げた點から且つわが國の現状に鑑み相當である。しかるに本件配給違反行為の前に發せられた聯合國最高司令官の昭和二十年九月二十五日附製造工業の運営に關する覺書によれば生糸、絹糸、絹若しくは絹混織の織物又は絹若しくは絹混織の仕上り衣服類は最高司令官の特別の承認なき限り解放せられずと指示せられてゐるから絹織物である羽二重の如きも同司令官の特別の許可がない限り一般的に凍結せられることになつたわけである。而して同司令官の發する覺書なるものは通常日本國政府又はその機關に向けられた命令で右勅令第三百十一號にいう指令と同視すべきものであつて苟も指令の趣旨に反すれば右大赦令によつて赦免せられるものでないと解するのが同令の精神であることは既に説明したところにより明白である。本件公訴事實に示されてゐる被告人等の爲した羽二重の配給違反の販賣行為は行為以前に發せられた右覺書の趣旨に反すること勿論であるから覺書のわが國民に對する直接拘束力の有無を論ずるまでもなく占領目的に反するものとして赦免せられないものという外はない。尤も右勅令第三百十一號は被告人等の本件販賣行為のあつた以後なる昭和二十一年七月十五日より施行せられたものであるととは辯護人所論の通りであるが被告人等の行為が直接に同勅令違反としての犯罪であるから赦免されないというのではなくて行為が苟も同勅令第二條第三項に掲げる行為に該當すれば赦免されないとするのが大赦令の趣旨と解すべきであるから被告人等の本件配給違反行為より以前に右勅令が施行されたことがこれを赦免しないために必要ではない。

以上説明のように被告人等の行為は右大赦令第一條但書によつて赦免せられないものと解すべきであるに拘らず原判決が同令第一條本文により公訴權が消滅したものとして刑事訴訟法第三百六十三條第三號に従ひ被告人等に免訴の言渡をしたのは法令の解釋適用を誤つたものというの外なく論旨は理由があり本判決は破毀を免れない。

而して右法令の違背は事實の確定に影響を及ぼすから刑事訴訟法第四百四十七條、第四百四十八條の二判に従ひ主文の通り制決する。

（裁判長判事 吉田常次郎 判事 小泉英一 判事 今谷健一 判事 深井正男 判事 大野美稻）

